

「時任謙作」のもう一人の兄・姉・弟の行方

——『暗夜行路』諸本追跡——

町 田 栄

末梢、些事にすぎぬが、右に掲げた標題のことごとくについて事実だけを記してみたい。

現在、『暗夜行路』に登場する時任家の兄妹は、兄信行、主人公謙作、妹咲子、その下の異母妹妙子の四人である。いずれも、作中に重要な役をふられて活躍している。

しかし、完全にこの四人におさまるまでに、登場以来、三十年間の形成史を持つ。過剰な言を弄しているだろうか。作中人物の進退は、字句修正などの比ではない。

ここで〈現在〉というのは、もっとも流布している菊判紺布装、全十四巻別巻一付『志賀直哉全集』（昭四八・五・一八～四九・一二・一〇 刊 岩波書店）ならびにその第二刷、全十五巻別巻一付『全集』（昭五八・四・二〇～五九・七・二〇刊）の中で、第五巻（昭四八・六・一八刊、第二刷は昭五八・八・一九刊）所収の全『暗夜行路』を指す。第二刷は新資料を盛った、第十五巻を最終配本に増補したのである。当然ながら一、二刷の本文に異同はない。誤植は正されている。二刷の『暗夜行路』が決定本だ。

その本文は、紅野敏郎氏が新書判薄茶布装、全十七巻『志賀直哉全集』（昭三〇・六・九～三一・二・二七刊 岩波書店）中の第七、八巻（昭三〇・八・二四、同九・九刊）所収のものを底本に用い、主に雑誌発表のものに校合している。『日本近代文学大系31志賀直哉集』（昭四六・一・一〇刊 角川書店）所収のそれも、遠藤祐氏が同様の作業をほどこしている。この意味で、〈現在〉とは新書判『全集』所収の『暗夜行路』をもって成立したといえよう。実際、志賀生前の最後となった、この全集出版には作家の手が充分に入っている。

〈謙作きょうだい〉に限っていえば、すこし事情が異なる。その前に、多少の経緯がある。

かつて、標題のひとびとを加えると、都合、七人のへきょうだいが登場する。正確には、最大限七人に数えられる構想であつたらしい。同一時点で七人、ではない。作中に、ある者は誕生前であつたり、消え去つたりして増減、出入がある。単純に、雑誌初出に描かれていて、単行本に初収録に際して、削除改訂されたわけではない。

究極的に消え去つた三人は、顕著な活躍を示していない。だが、登

場した以上、作品世界で生きる可能性を与えられていたはずだ。作家の構想裡にあったひとびとである。いったんは登場して、活動の場を得ず、悲運にも失踪する。死亡者ではない。物理的に、削除改訂と目すべきではなからう。構想変更のなせるわざだ。〈行方〉と称するゆえんである。行方不明になってしまふ。その時点は、次に述べるように、ほぼ明らかにできる。生存期間は短くないからである。へもう一人の兄、〈姉〉、〈弟〉を惜しみ、思いやりたい。

*

周知の通り、『暗夜行路』はそれと題されて、終始、『改造』に長期連載（大一〇・一―昭一二・四、断続二六回分載）する前に、二回ほど部分的な先行、試行発表をしている。現前篇「第二」の「十三・十四」章にあたる『憐れな男』（大八・四『中央公論』）と、現前篇「序詞」（主人公の追憶）にあたる『謙作の追憶』（大九・一『新潮』）との二短編である。後者を編入するとき、つまり一年後、『暗夜行路』の巻頭にすえた第一回掲載時に、「（この一篇は前に雑誌『新潮』に載せた事があつた。作者）」と付記している。至近距離にあつたからだろうか。

明確に「時任謙作」を共通の主人公とする二短編小説、現前篇部の頭尾を画す位置を占める――を、あらかじめ発表して置いたものゆえ、『暗夜行路』前篇部の構想は、かなり熟していると思われる。射程をきめた有効な布石である。

しかし、執筆の方ははかばかしく進まない。出来たところから、掲載誌も特定せずに発表していくという、短編連作の形式を踏むのだ。窮余の策ではある。が、特異な執筆、発表の方法ではないようだ。別題名、実は章名の短編小説群を随意、随時に掲載して、のちに編成替え

をして完成する長編小説に、当時、瀧井孝作『無限抱擁』（昭二・九・二〇刊 改造社、初出大一〇・八―一三・九各誌四分載）がある。

さて、〈謙作きょうだい〉の問題は、『憐れな男』に始まる。胚胎し、惹起する。

主人公は、「お栄」という「彼の祖父の妾だつた四十四五の女」と、「大森」の家に同居している。それらの事由も、人間関係もいっさい知れぬ。「時任謙作」は不充足で、放恣な生活を送る、背後に「恐しい、醜い顔をした亡霊」を負った、年齢不詳の青年である。免れがたく、「憐れな男」を自認する主人公なのだ。

へきょうだい〉は二人が登場する。

まず、ひとりは命名されていないが、「横須賀の兄」である。横須賀在住の意味はわからない。その来訪が何がなしに、しきりに待たれている人物だ。主人公はあてもなく、「三時七分に横須賀からの汽車が着く（註、大森停車場）。来ればそれだ。それで来なければ今日も来ない」と、思い決めて待つている。のちに、「鎌倉の西御門といふ処に百姓屋の小さい離れを借り、毎日円覚寺の僧堂に通ふ」と語られる、兄「信行」の原型である。この日も、「兄に会へば自然その日の行動はきままるが、若し兄が来ないとすると、それから先どうするかまるでわからなかつた」。

もうひとり、妹「咲子」である。「本郷の家へ行かうかしらと云ふ氣を一寸持つた。咲子と云ふ十七になる妹に会ひたい氣がした。然し父が居るかも知れないと思ふと又急に厭になつた。而して咲子とでも氣持がしつくり行きさうもない氣が直ぐして来る」。「咲子」はのちに、「人と人ととの關係」に困憊した主人公に緩衝の、慰藉の、とくに恵福感をもたらす役割が課されている。すでに、不快な父子關係

に潤滑油をさす働きをほの見せている。「兄」に比較すれば、良家の子女らしい消極的な機能だ。三者相互の年齢差はわからない。

二日間の「ミデメ」な生活を決定し、先導したのは「兄」である。

両日とも、「横須賀の兄」は来ない。主人公は不安定にも、彷徨する。なぜか、「横須賀の兄」も「大森」に住む主人公も、父の家を出て、別個の生活を営んでいる。「本郷の家」の家族は、「父」と「妹」咲子とが描かれている。他に誰がいるのか。相続人はあるのか。これらも、また不明だ。

『隣れな男』という短編に完結性、独立性はない。よって来た事情を欠く。現況の断面を描いたのである。末尾の「豊年だ。豊年だ」は無為、不毛、耽溺の果てに、ある救済に達している。帰着地だ。従って、この作品の性格は、埋蔵量の豊富な溯及性を帯びることになる。

着弾点をきわめて置いたのである。以降の逐次的な進行は、ひとまず閉じられよう。

だから、後年(大一一・一『改造』)、現後篇「第三」の第「一」から「五」章を書き継ぐとき、「大森の生活」脱出を語って、新規の「京都」生活に始める。時間も連続せず、「二ト月程」の間隔をつけて飛躍したのだ。

連作の形式としては、『謙作の追憶』一編をつなぐにとどまる。第六章の挿話群に冠して、標題のわきに、次のようなただし書きを付けている。

(時任謙作は母と祖父との不義の児であつた。然し彼はその事を二十五六になるまで知らなかつた。)

同じく「時任謙作」を主人公に立てた、第二回の発表作である。真に、〈謙作もの〉と称するに足りよう。『隣れな男』の現平面に、寸分

たがわず接岸している。——「大津・順吉」を主人公とする(作品によってフルネーム、姓、名で表記される)四作品、すなわち「大津順吉」、「和解」、「鶴沼行」、「蝕まれた友情」がある。いずれも志賀自身を、等しく主人公とする。しかし、これらの物語はたがいに緊張、不可避の連係、展開で結ばれていない。連作ではないからだ。

ふたたび、『隣れな男』物語を提出する。その「二十五六」歳の内奥を、無惨な出自を知った懊悩と解き明かす。結果的には、「母と祖父との不義の児」という、長編構想の基軸を予告している。この時点で、それが『時任謙作』、もしくは『暗夜行路』と命題されていた確証はない。ただ、『隣れな男』にたたる「恐しい、醜い顔をした亡霊」の正体を明るみに出しているのだ。母も、祖父(実父)も、鬼籍の人ではあろう。そうでなければ、出生の秘事など誰れも教えまい。

「不義の児」本人が「六歳」時の、「四つか五つか」の自身を想起してみる。今にして、不倫の子と思ひあたることばかりであった。

第「一」章の冒頭部は、

謙作が自分に祖父のある事を知つたのは、彼の母が死んで二ヶ月程経つて、不意に祖父が彼の前に現はれて来た、その時であつた。其時彼は六歳であつた。

母の死と入れかわつた、闖入者が少年の人生をにぎって動かし始める。死とともに「現はれて来た」とは、文字通り「亡霊」の出現である。——『暗夜行路』の連載進行中に、それまで謙作少年の知つたのは、母方の「芝の祖父上」だったと判明する。といつても、出生地は知れない。

他の同胞が皆自家に残つて居るのに自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は子供ながらに面白くなかつた。然し不公平には幼

児から慣らされてゐた。

その理由を、「他人に訊く気も彼には起こらなかつた」。もし聞きた
だすとすれば、「同胞」中に「兄」しかあるまい。『憐れな男』に接続
する構想であるばかりでなく、これらの挿話群も「兄」に到達して、
総括されているからだ。

少年は「本郷の家」から中根岸の「祖父の家」に引き越す。そこに
は「お栄といふ二十三四の女」がいる。「四十四五の女」が「二十三
四」の頃は、「二十五六」歳の主人公が「六歳」である。彼我ほぼ整
合して、これは二十年前の追憶だ。「中根岸」の家から「大森」住い
の間に、約二十年間が一挙に経過している。

亡き母の痛烈、哀切きわまりない愛情、「常にく冷たかつた」と
しか映らぬ父が物語られる。とりわけ「他の同胞」、「同胞は皆」の文
字が頻出する。幾人かは明記されぬへきょうだい」に周繞されながら、
少年は、なげとも知れぬ差別、孤立、屈辱の感を深めて成長する。

へきょうだいとの交渉は、具体的には、第「六」章に寸描される。
ここにも、ドラマが内臓されていよう。児童として軽視してはなるま
い。一編の最終章である。

其次の日曜珍らしく彼の兄と弟とが、女中を連れて根岸の家へ遊
びに来た。本郷の家の者が根岸の家を訪れたのはそれが初めてだ
つた。先日の事を気にした父が寄越したに違ひなかつた。

彼の兄はこれから三河島の田甫に蛙退治に行くのだと云つて彼を
誘つた。

新たに「弟」をまじえる。「六歳」の謙作少年の「弟」だから幼児
である。二十年後に「十七」になる「咲子」はまだ生れず、異母妹と
わかる。「父」は再婚したのである。

「女中を連れて」は、「弟」が手をひかれ、おぶわられて来たのである
う。「三河島の田甫」へ行くにも、守り役の「女中」を伴つたに違
ない。「弟」は、何ひとつ活動をさせない。「他の同胞」内に登録し
て置いたのである。作家の構想に、「弟」は確実な席を占めていたの
だ。

第「六」章の主人公は謙作を凌いで、「兄」に代わる。見事に造型
されている。謙作は享受者にすぎない。最初の「本郷の家」からの来
訪を、「父が寄越した」という幼い推測には保留がつけられよう。少
年の期待や甘えである。「父」は容れまい。むしろ、「兄」の申し出を
「父」が許したとする方が、実状に即す。蓋然性は高い。「父」は「先
日の事を気にして」、わずかに禁制を解いたのである。改行の意味も、
解説される要があろう。

「兄」は、ひとり隔離され、逼塞する弟を「蛙退治」に連れ出した
かつたのだ。弟が訪ねて来た日は、「同胞は皆書生と目黒の方へ遊び
に行つて」角力事件は知らぬ。しかし、家から出した「父」と出され
た謙作とが、「同胞」の留守中、「しつくり」行つたとは想像しないだ
ろう。ことさら「弟」に、冷淡な任打ちの父を属目していた「兄」で
ある。心優しい理解者の後身が、これもまた、「父の家」を出てしまつ
た「横須賀の兄」である。「憐れな男」が慕わしく、追従しようとする
「兄」、その若き姿である。

しかし、「殿様蛙を不意に杖で打ち殺す遊び」の「先達」者、一行
の辛領者は懷疑、逡巡の現「信行」にそぐわぬ。円覚寺の参禅者を、
彼に擬していたか、わからない。もちろん、参禅の仮構を抱いていた
かも、謙作の「兄」をひとりに限定していたかも、不明だ。

それは晴れやかな遊びといふ条、あまりに大量殺戮、残虐な行為で

ある。弟疎外に対する「兄」の憤懣、正義感を宿している。闊達、至純な遊戯に類さぬ。このように解説しなければ、五話を読み積んでカタルシスは得られまい。

「もう千位殺したかネ。千人斬りだぜ」と先達をしてゐる兄が得意らしく皆を顧みて云つた。(了)

大人びた口吻である。「千人斬り」の大願成就、悲願達成の語義をわきまえている。謙作少年とは相当な年齢差をもつ「兄」である。中学校の学齢であろう。十歳以上は開いている。してみれば、この「兄」は謙作出生の秘密を悟っている。異父弟への、男らしい憐憫が働いている。謙作と「兄」との間に「他の同胞」、もう一人の兄か、姉か、あるいは両者をはさむ余地は充分にある。

『憐れな男』と『謙作の追憶』とは同一平面に載って、「不義の兄」を主人公とする家庭小説、家族小説の容量を盛ることになる。この構想は『暗夜行路』に流入するものだ。

順序には、『憐れな男』を初収録した作品集『荒絹』(大一〇・二・二三刊 春陽堂)の編集が行なわれる。初出作は二日間を一行アキで分けているが、こちらでは「上・下」をつけて、やや構成化をはかる。本文に異同はない。執筆時も「大正八年二月」と明記して、『中央公論』発表時を示している。

*

翌大正十年度は『暗夜行路』の「序詞(主人公の追憶)」、第一「一」から「二十六」章まで掲載する。再出版、試行二作をひきずって出発したのだ。

その第一回連載時に、有名な「武者小路実篤兄に捧ぐ」の献辞を添

える。『謙作の追憶』は採用されるが、異同は大きい。「序詞(主人公の追憶)」の設定である。ただし書きを省き、第六「六」話は全文削除、従つて「弟」は消去される。各断章一行アキで、章数字もうたぬ。進行、累積性を除いたのである。全「謙作」は「私」に改める。「序詞」は、主人公謙作の書いた自叙伝に仕立て直したのである。「兄」も「咲子」も特記されぬ。「他の同胞」・「同胞は皆」に包含する。

個別のへきょうだいは次のように登場する。第二「二」章(現、第一の二)に、

彼は不凶、直ぐ上の兄の信行の事を思つた。彼は家族の誰れよりも此兄に好意と親しみを持つて居た。

命名され、「直ぐ上の兄」と特定される。初出時の大きな年齢差を看過しなかつた。「直ぐ上の兄」の上に、兄か、姉の存在する可能性を残す。信行が「父の家」を出る人物と構想する以上、家督者の構想も用意しているだろう。「妹」は第三「三」章(現、第一の三)に、

別れ際に信行は咲子の伝言だと云つて、若し暇なら明日、帝劇のマチネーに咲子と妙子を連れて行つて呉れと云つた。／(略)午頃誘ひに來た十六と十二になる妹達を連れて謙作は帝国座の女優劇を見に行つた。

第四回連載時(大一〇・四)の第十五「五」章(現、第二の三)に、「姉」が登場する。

父の留守中、祖母や母や兄や姉などと住んでゐた茗荷谷の小さい古ぼけた家

謙作を中心に「直ぐ上の兄」信行、その上の「姉」、下に「咲子」と「妙子」との妹である。なお、『憐れな男』で「十七になる咲子」は、年齢が削除される。

『謙作の追憶』の初収録作品集は『寿々』(大一一・四・二〇刊 改造社)である。原題をとどめるが、「序詞(主人公の追憶)」と同文だ。執筆時も初出時でなく、改訂時の「(大正九年一月)」と付記される。同腹の「弟」は初出『新潮』にあとをしるしただけで、形跡を失なう。この冷遇を作家は忘れてはいない。

ところで、『暗夜行路』前篇の連載を終えた翌年、その収録単行本『暗夜行路』(大一一・七・六刊 新潮社)が出版される。この時に、またひと改訂がほどこされる。大正十一年六月四日付の園池公致に宛てた書簡(二七五)に、

改造の小説と『暗夜行路』の校正がかもあつて暫くいそがしくしてゐる、

『暗夜行路(後篇)』の「十二」章後半から「十四」章(現、第三の十二~十四)を八月号に当りて執筆中である。前篇の「校正」は『謙作の追憶』収載本の刊行後に行なわれている。持ち越しのへきょうだいの問題の解決である。が、別種の問題をはらむものになってしまう。単に字句修正ではなかつた。

「序詞(主人公の追憶)」に加筆がある。冒頭に、
私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病気で死に、その後二月程経つて、

第五話にも、重要な加筆訂正がある。

根岸の家へ移つて、半年余り経つた或る日曜日か祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度兄達二人は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云ふ未だ一年にならぬ赤児とそして父だけが家に居た。

謙作六歳、母の死後八ヶ月あまりの時点である。生母は、「咲子」

の出産後の発病で亡くなる。同腹の妹「咲子」が「弟」にとつて替わる。「弟」消去をこれで補つたわけであろう。その下の「妙子」が異母妹になる。謙作の五歳下に「咲子」がいる。すると、咲子が「十六」歳の時、謙作は二十一歳位である。主人公の日常生活に照らすと、驚くべき老成だ。異常な男である。

さらに、「兄達二人」となる。誰れ／＼を指すのか。「信行」はといふと、

彼は不図、兄の信行の事を思つた。彼は誰よりも此一人の兄に好意と親みを持つて居た。彼は此兄を一寸思つただけでも、幾らか日頃の気分を取戻せた。

「直ぐ上の」が削除され、改訂される。「兄達二人」はわかりにくい。二人の兄か、兄と姉か、判定しがたい。矛盾点とすべきか。——後出するが、志賀は「兄貴が二人」としてゐるらしい。ならば、「此一人の兄」は二人のうち、信行を強調指示するものとなる。へもう一人の兄の登場だ。何分にも「兄貴が二人」ははるか後年の発言ゆえ、不確定な要素を含む。兄と姉とすれば、「此一人の兄」とも整合して齟齬しない。

「姉」については異同はない。

以降、『暗夜行路』前篇収録の諸本は、右の新潮社版を底本とする。管見に入ったものを挙げる。

『現代日本文学全集25志賀直哉集』(昭三・七・一刊 改造社)

一巻本四六倍判、背黒革・クロス装 『志賀直哉全集』(昭六・六・

一五刊 改造社) 巻末に「編輯 尾崎一雄」とある。

改造文庫『志賀直哉全集第八卷暗夜行路(前篇)』(昭六・一二・一二刊)

長く放置していた『暗夜行路』は、全九巻『全集』編纂の計画を契機に完結される。その第七、八巻に前後篇を分載し、それぞれ「序詞（主人公の追憶）」・第一（一～十二）・第二（一～十四）、第三（一～十九）・第四（一～二十）の構成に整える。本文はともかく、現行の構成が確立したのである。『全集』第八巻（昭二二・一〇・一六刊）が後篇収録本の初刊行である。底本として尊重されていく。

九巻本菊判紺布装『志賀直哉全集』第七巻（昭二二・九・一八刊 改造社）各巻末に「校正 加納和弘／相川菊子／木佐木勝」とある。

岩波文庫『暗夜行路前篇』（昭一三・三・一〇刊）

初めて前後篇を一巻に納め、しかも、梅原龍三郎・小林古径・榊原紫峰・坂本繁三郎・佐藤清蔵・武者小路・安井曾太郎・安田靉彦の装画九葉を載せた、超豪華本が、

『暗夜行路』（昭一八・一一・一九刊 座右寶刊行會）である。

右はすべて「兄達二人」・「姉」を踏襲している。

へもう一人の兄」が消えて、「信行」だけの兄に決するのは、

『志賀直哉選集第一巻暗夜行路前篇』（昭二二・一・一〇刊 小山書店）

そのいきさつは知らない。編集、校正の記録も、解説のたぐいもない。

（本郷の父の家へ行った。丁度兄は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云ふ未だ一年にならぬ赤児と）

次いで、『現代日本小説大系27志賀直哉集』（昭二四・四・三〇刊 河出書房）でも、へもう一人の兄」は消えている。「解説」は青野季吉が書いているが、その末尾に、

附記 この長篇には改造社「志賀直哉全集」本（昭和十二年）岩

波文庫本（昭和十三年）小山書店本（昭和二十二年）などがある。本書は小山書店に拠り、他書との違ひを作者にただして完璧を期した。最完本とも、決定本ともいへると思ふ。

現行から見れば、まだ「姉」が残っていたのである。「姉」の発見と改訂は、阿川弘之氏によって行なわれる。昭和二十五年五月一日付志賀宛の阿川書簡（『全集』別巻『志賀直哉宛書簡』昭四九・一二・一〇刊、二刷は昭五九・六・二〇刊）に、

失礼乍ら端書にて申上げます、十二年版全集『暗夜行路』（前篇）二四四頁第二行目に

「祖母や母や兄や姉などと住んでゐた若荷谷の小さい古ぼけた家」とございますが、主人公に「姉」があつたといふ記述は此処だけのやうに存じますが、如何でございませうか、私の思ひ違ひかも知れませぬ最後の読合せの時充分注意致してみますが、もし御訂正なさいます御考がございましたら一言御通知頂きたく勝手乍らお願申し上げます

幸いにも、対応する志賀の返信がある。昭和二十五年五月二日付の阿川宛書簡「二六六七」に、

おハガキありがたう、確かに姉といふ人物他で出て来ないなら、どうか除いてくれ玉へ随分注意してゐるつもりで色々さういふ事がある、此間は兄貴が二人だつたし、早々

結局、ケアレス・ミスとして処理されてしまう。「姉」の指摘に対

して、「兄達二人」が連動、想起されたのではない。「此間は」は、先
年来の小山書店、青野とのやりとりを指す。

阿川・志賀の往復書簡は、全八巻A5判白和紙装『志賀直哉選集』
(昭二四・一〇・三〇)〜二七・九・五刊 改造社)の編集、刊行の途次に
かわされる。『暗夜行路』前篇収録の第五巻(昭二五・七・六刊)は、

父の留守中、祖母や母や兄などと住んでゐた)

と改修される。この『選集』全巻末に「校訂・校正 阿川弘之」と明
記されている。

時任謙作の〈弟〉、〈もう一人の兄〉、〈姉〉の構想は命脈を断られた
のである。「姉」と「兄達二人」とが、ある連動性を潜ませていたか
も知れぬ点は判明しない。〈きょうだい〉問題は時任家の人数、順序、
主人公の年齢設定、家督者など不可欠の構想であったはずだ。放置し
てしまう。以降、

『志賀直哉集 暗夜行路』(昭二六・三・三一刊 新潮社)

『志賀直哉作品集』第四巻(昭二六・四・三〇刊 創元社)

『暗夜行路——現代日本名作選——』(昭二七・一一・三〇刊 筑摩書
房)

『昭和文学全集7 志賀直哉集』(昭二八・二・一〇刊 角川書店)

『現代文豪名作全集10 志賀直哉集』(昭二八・七・二〇刊 河出書房)

『現代日本文学全集20 志賀直哉集』(昭二九・六・一五刊 筑摩書房)

など所収の『暗夜行路』が踏襲する。

志賀畢生の『暗夜行路』は、大正十年に連載を開始するまでに、直
接には、大正元年秋以来の形成前史を持っていた。そして、長期の連
載とその後にも長く、いわば進歩史、形成後史を持つ。拙稿は、その
一端なりと触れえただであらうか。